

## ICSU 75 周年行事「Global Scientific Challenges: Perspectives from Young Scientists」参加報告

芳村 圭 (Scripps Institution of Oceanography, UCSD・東京大学生産技術研究所)  
大武美保子 (東京大学人工物工学研究センター・学術統合化プロジェクト(ヒト))

### I. はじめに

10 2007年4月4日から6日、ドイツ南部の国境の町リ  
ンダウにおいて、国際科学会議(ICSU<sup>1</sup>)発足 75 周  
年の記念会合が開かれた(ICSU, 2007)。会合では、  
世界各国から140名以上の若手研究者が招聘され、  
科学研究における国際協力と学際連携・社会への関  
わり・政策への貢献などというテーマに関して丸3日  
間話し合われた。芳村と大武は、それぞれが深く関  
わっている科学技術プログラム推進機関である  
WCRPとCODATAから推薦を受け、本会合に参加  
することができたため、ここに会合内容を報告する。

20

### II. 会合の背景

リンダウはドイツ・オーストリア・スイスの国境にあるボ  
ーデン湖に面する歴史ある町である。春先とはいえ  
アルプスのふもと、ということで寒さを覚悟していたが、  
湖の向こう側にそびえるアルプスには雪が残ってい  
たものの、リンダウでの天気はいたって穏やかなもの  
であった。フランクフルトやパリ、ロンドンなどでローカ  
ル路線に乗り換え、最寄りのフリードリヒスハーヘン空  
港まで飛ぶ、というのが一般的な経路であるが、ミュ  
ンヘンやチューリヒから鉄道を使うという手もあったら  
30 しく、そうすればアルプスの山並みを眺めながら食堂  
車でワインを楽しむなどといった優雅な旅になったか  
もしれない。

ICSUとは1931年に設立された国際的な非政府組  
織であり、科学と社会にとって重要な問題の解決に  
資するための学際研究を国際的な枠組みの中で計  
画・推進することを主な活動としている。ICSU加盟団  
体は、各国の学術推進機関(日本であれば日本学術  
会議)が105、各分野の学術連合(Scientific Union;  
40 IUGG・IGUなど)が29で成り立っており、加えて提  
携学際組織・プログラム等(Interdisciplinary Body;  
CODATA・WCRPなど)が18あるとのことであった。

会合には、ICSU加盟団体および提携学際組織の

うち約80の団体がそれぞれ35歳程度までの研究者  
1~4名程度を推薦し旅費を負担するという形で、全  
世界71カ国から142名の若手研究者が参加した。こ  
の他、会合企画グループ(後述するように彼らも若手  
である)、ICSU本部(パリ)および地域事務局の執行  
委員会メンバー(彼らの大半は「年長者」であった)を  
50 加え、総勢としては160名近くの参加があった。日本  
人としては、芳村・大武のほか4名の日本学術会議  
からの推薦者(東京学芸大学 鴨川仁氏・神戸大学  
財城真寿美氏・滋賀県立医科大学 谷垣健二氏・共  
立女子大学 西山暁義氏)が参加していた。

### III. 会合内容

#### 初日(4/4):

午前・午後に参加登録を行い、夕方よりICSU会長  
Govardhan Mehta 教授による講演”Science and  
60 Technology for a better future: Emerging  
paradigms”から会合がスタートした。その後の  
ReceptionさらにBarとIcebreakingな交流が夜遅く  
まで続けられた。

#### 二日目(4/5)午前:

ICSU副会長 Khotso Mokhele 氏による講  
演”Building bridges within the scientific  
community”から始まり、その内容を踏まえ、科学コミ  
ュニティにおける国際協力・学際連携について4会場  
でのパラレルセッションが行われた。それぞれの会場  
70 では、3~4名の若手研究者がバラエティに富んだ短  
い発表を行ったあとに議論を行うという形式が取られ  
た。芳村・大武ともに学際連携のセッションに参加し  
た(会場は別)。学際連携セッションでは、分野ごとの  
「勢い」の差や評価手法の違いがネックになりやすい  
ことや、自分自身が Trans-disciplinary な研究者に  
なることと、それぞれの専門家の知識を  
Trans-disciplinary に自らの研究で生かすこととは大  
きく異なる、との認識が示された。

#### 二日目(4/5)午後:

80 “Building bridges from science to society”と題し  
て、科学者と社会との関わりについて、合計10名の  
若手からの発表があった。前半は Public  
engagementに、後半は Science for policy について  
焦点をあてた、それぞれの国や研究分野に応じたケ  
ーススタディ的な紹介がなされた。Public  
Engagementのセッションでは、研究者向け発表と一  
般向けの発表の違いと心得、情報発信としてのITの  
高度利用などが指摘された。また、研究者側だけで

<sup>1</sup> イクスーと発音する。

はなく、現役の Science Journalist の立場からの科学雑誌と一般誌での記事の取り扱いの違いなどが意見された。Science for policy のセッションでは、アフリカをはじめとした発展途上国における政策決定への科学技術・知識の貢献の事例について紹介があり、政策決定者との意思疎通について議論された。

#### 三日目(4/6)午前:

“Working with the private sector”というテーマについて、民間企業からの参加者を含めた 6 名からの発表があった。特に、基礎教育、トレーニング、開発研究のための公共セクターと民間セクターの協力の重要性などが議論された。次のセッションでは、“CO<sub>2</sub> Neutral Conference”の概念の紹介とともに、本会合の交通・宿泊・会議にかかった CO<sub>2</sub> 負荷量が試算された。それによると総計 521ktonCO<sub>2</sub> で、それを補填するため、通貨に換算した値€6,500(€30/人+ICSU 負担)を「CO<sub>2</sub> クリーン」なプロジェクト(風水力発電所や発展途上国の教育プログラム)に寄付されることとなった。

#### 20 三日目(4/6)午後:

6 名から“Scientific freedom and responsibilities”に即した発表があり、その後パネル形式で研究者への自由及び規制と科学者個人の責任について話し合われた。現代の情報伝達の速さ(例として arXiv.org が紹介された)は研究者にとっての自由を促進するものであるが、時に科学者の、社会の一員としての研究の自由と社会に果たすべき責任のバランスを失ってしまう理由になりかねない、などという指摘があった。また社会全体の、利益追求を偏重した傾向に対しても危惧があった。その後、二日目のパラレルセッションの各会場でのまとめがビデオにて上映され、その編集作業の迅速さに会場は驚きに包まれた。最後に、会場からの意見も取り入れた会合全体のまとめを行い閉会となった。

#### IV. 終わりに

一般的なテーマに対して何かまとまった意見を出そうというのは大抵難しい。特に、今回の会合のように多種多様な分野及び人種の研究者が集まる会合においてはおさらである。本会合では、芳村ら(2003)の時と同様に、限られた時間に参加者を缶詰状態にして話し合うことによって、非常に効率良く、若手科学者のこれからの科学研究人生において認識しておくべき社会と科学の係わり合いの重要性と、共通の研究目的のために異なる専攻分野を持つ科学者の連

携の可能性について、有意義な議論が繰り広げられた。

さらに本会合では、「議論をきっかけとしてとにかく人脈をつくり、今後の糧にしてくれ(そしてフィードバックとして主旨にちなんだ解決策のヒントをくれ)」というのが重要な目的だと、ICSU 会長自身が明言しており、その目的も十分達せられたと思う。そのような視点からアジェンダをもう一度眺めると非常に良く作りこまれていた。例えばパラレルセッションやビデオフィードバック、さらにビデオでの個人メッセージ撮影など、実にさまざまな試みによって全員がそれなりに意思表示をできるよう工夫されていた。また、「会合の関係者しかいないのでは?」と思わせる小さな町という選択も秀逸で、ホテルでの朝食からランチ・コーヒータム・夕食・その後のバーでと、四六時中参加者のみと顔を突き合わせているうちに自然と親交を深められた。

そのような良く作りこまれたアジェンダ及び企画が、国際的な若手組織である WAYS、ISYP、The Scholar Ship、LEAD、UNESCO-LOREAL fellowshipからの代表者に ICSU の事務局 3 名が加わった 7 名で形成された Conference Planning Group によって作られた、というから驚きであった。ちなみに、会合の最後に行われたボーデン湖でのクルーズディナーにはさらに驚かされた。

一点だけ残念なことは、会場からの意見を求めたときに年長者の発言が若手のそれよりも多かったことである。自分自身を含めて若手からの意思表示がもつとないといけない、と改めて感じた。今回の企画自体は一回限りのものであるが、ここで知り合った同世代の研究者と、今後何らかの研究企画を立て、新しい流れを作っていきたい。

#### 謝辞

80 このような貴重な機会を与えて下さった WCRP と CODATA、並びに特にご助力とご助言を頂いた WCRP Director の Henderson-Sellers 教授と東京大学生産技術研究所の沖大幹教授、CODATA President の Dr Krishan Lal と Past President の東京大学新領域創成科学研究科の岩田修一教授に深く感謝いたします。

#### 略語

90 CODATA: Committee on Data for Science and Technology

ICSU: International Council for Science  
IGU: International Geographical Union  
IUGG: International Union of Geodesy and  
Geophysics  
IYSP: International Student/Young Pugwash  
LEAD: Leadership for Environment and  
Development  
WAYS: World Academy of Young Scientists  
WCRP: World Climate Research Program

10

#### 参考文献

芳村圭, 蔵治光一郎を含む22名.『2020年の水文学  
と地球環境学を考える第2回研究集会』報告. 水  
文水資源学会誌, Vol.16, No.4, pp.449-455,  
2003.

ICSU, Global Scientific Challenges: Perspectives  
from Young Scientists,  
[http://www.icsu.org/10\\_icsu75/75ANNIV\\_Young.html](http://www.icsu.org/10_icsu75/75ANNIV_Young.html), 2007. (HP から発表スライド、ビデオフィ  
ードバックや開催の様子を撮影した写真を見ることが  
できる。)

20

[写真1、写真2(次項に添付)を挿入]



写真1: パラレルセッション開催場所となったリンダウ市庁舎前にて

Photo1: A group photo taken in front of the old town hall.



- 10 写真2: 学際連携に関するパラレルセッションの様子  
Photo2: A snapshot of the parallel session on trans-disciplinary collaboration.